

《書 評》

Raymond Van Dam, *Rome and Constantinople: Rewriting Roman History during Late Antiquity*

Texas: Baylor University Press, 2010, pp.x+101.

南 雲 泰 輔

1970年代以降、P. Brown, G.W. Bowersock, Av. Cameron らを主唱者として創始され、「古代末期」世界の「移行」「変容」「継続」を主張し、現在に到るまで多くの研究者たちを引き付けてきた「古代末期」(Late Antiquity)研究は、21世紀の最初の10年間を経て新たな局面を迎えているように思われる¹⁾。それは「古代末期」史家の「衰退と没落」を拒絶する態度に対し、「衰退」概念の擁護や「没落」の事実の強調が政治的・経済的な理解のレベルにおいて無視しえぬ強力な批判として提起されているからというばかりでなく²⁾、より重要なことは、「古代末期」史家たちがかかる批判を決して等閑視してはいないということ³⁾、そして「古代末期」なる概念そのものについて、かつて1980年代末に一度は放棄された内在的検討が再び開始されるかのごとき動きが窺知されるということである⁴⁾。かかる動きの担い手となるべきは、無論、「衰退と没落」概念の批判にその努力の多くを傾注せざるをえなかった「古代末期」研究の第一世代ではもはやありえず、今や学会「古代末期の境界変動」及び学術雑誌『古代末期雑誌』を中心として、アメリカ合衆国の「古代末期」研究を支える第二、第三の世代こそ⁵⁾、かかる困難な課題に取り組むことになるはずである。

この「古代末期」研究の担い手たる新しい世代の研究者のひとりとして、現在米国・ミシガン大学で教鞭を執る Raymond Van Dam を挙げてよいであろう。Van Dam は、後期ローマ帝国、その社会と宗教、またローマ支配下の中東ギリシア語圏を研究対象領域とし、1977年に英国・ケンブリッジ大学で博士号を取得している⁶⁾。我が国では「古代末期」のガリアに関する *Leadership and Community in Late Antique Gaul* (Berkeley, Los Angeles, Oxford, 1985) の著者としてつとに知られるが⁷⁾、さらにガリア関連の著作として *Saints and Their Miracles in Late Antique Gaul* (Princeton, 1993) を公にしたのち、「古代末期」のカップパドキアに関心を移して、三部作ともいふべき *Kingdom of Snow: Roman Rule and Greek Culture in Cappadocia* (Philadelphia, 2002), *Becoming Christian: The Conversion of Roman Cappadocia* (Philadelphia, 2003), *Families and Friends in Late Roman Cappadocia* (Philadelphia, 2003) を次々に公刊している。最近ではコンスタンティヌス1世治世を扱った *The Roman Revolution of Constantine* (Cambridge, 2007)⁸⁾ を著すなど、多作な研究者である。

その著者が、2009年2月に米国・ベイラー大学のチャールズ・エドモンドソン歴史講座(Charles Edmondson Historical Lectures)で行なった講義をもとに世に問うたのが、ここに取り上げる『ローマ市とコンスタンティノーブル市——古代末期のローマ史を書き直す』である。ローマ市とコンスタンティノーブル市というふたつの都市が経験した様々な変化の対比的把握を通じて、「古代末期」においてローマ世界がこうむった大きな歴史の移行のさまを描き出さんとする本書には、「古代末期」史家としての著者の大局的歴史把握が、本文80頁の僅かな紙幅のなかに凝縮されているといってよい。本書の構成は以下の通り(括弧内は節題)。序章、第1章「古きローマ」(都市の代謝／なぜローマはこれほどの長い期間これほどに大きかったか？／新しい優先事項／古き首都のための新しい歴史／ローマ市とともに考える)、第2章「新しきローマ」(たくさんの歴史、十分でない歴史／キリスト教徒皇帝と東部帝国／新しき首都のための新しい歴史／世界史／コンスタンティノーブル市とともに考える／雨)、参考文献一覧、索引。以下、本書の内容を詳しく紹介したのち、その意義と問題点を明らかにするとともに若干の私見をも述べることにしたい⁹⁾。

まず序章は次のごとき一文によって始められる。「古代末期において、ローマ市はローマ帝国の壮麗と長命とを象徴するようになったが、他方においてコンスタンティノーブル市はますます増大する東方ギリシア語圏の属州と北部辺境地域の重要性を表現していた。」すなわち、古代末期に到るまでに、ふたつの帝国首都の運命は各々異なった方向へと向かっていった。かつて世界最大の都市であったローマ市は「蛮族」の波に呑み込まれ、他方コンスタンティノーブル市は6世紀半ばのユスティニアヌス治世において世界最大の都市となった。「ローマ市が印象的な過去を想起させるものであったとすれば、コンスタンティノーブル市は印象的な未来を予告させるようなものであった。」このふたつの都市は、いずれも巨大な建造物やモニュメント、またその壮麗さについての古代の記述によって現代の歴史家たちを幻惑させていると著者は述べ、古代末期のローマ市とコンスタンティノーブル市の各々についての刺激的な書物として、帝国首都としてのローマ市から教皇の座す中世のローマ市への変容を、当地に残るモニュメントから描き出した R. Krautheimer, *Rome: Profile of a City, 312-1308* (Princeton, 1980) と、演説・説教・法律・歴史など文献史料を用いて新しい首都の創造を論じた G. Dagron, *Naissance d'une capitale: Constantinople et ses institutions de 330 à 451* (Paris, 1974) とを挙げている。著者はこれらの書物の成果を高く評価しながら、しかしいずれの書物においても、これら巨大な都市とその膨大な都市人口にさまざまな物資を供給するということの経済的影響が触れられていないことを問題点として指摘する。

また同時に、近年の古代・ビザンツ経済史の注目すべき研究成果 W. Scheidel, I. Morris & R. Saller eds., *The Cambridge Economic History of the Greco-Roman World* (Cambridge, 2007)¹⁰⁾ 及び A. Laiu ed., *The Economic History of Byzantium: From Seventh through the Fifteenth Century* (Washington DC, 2002)¹¹⁾ のいずれにおいても、物資供給システムの実際的側面と、その結果として起こる帝国全域にわたる経済的行動・思考の形成の影響とが触れられていないこと

を、著者は重大な見落としだと批判する。なぜならば著者は、古代経済を文化的価値と社会的関係のなかに堅く埋め込まれたものとみなし、従って物資供給のロジスティクスは、多くの点においてローマ市とコンスタンティノーブル市の象徴的価値の有効性を促進したのだと考えるからである。すなわち、これらふたつの都市の「巨大な規模の象徴的価値は、物資供給の実質的困難をものとししない重要性を持っていた。」そしてローマ市とコンスタンティノーブル市というふたつの都市は、供給された物資を消費する首都住民と税を納める属州民の双方にとり、これらの都市が何を要求しているのかについて (about) 絶えず考慮せしめ、同時に、彼らが帝国支配とその輪郭について考える際には、それを「ローマ市」及び「コンスタンティノーブル市」のイメージとともに (with) 考慮せしめるという、象徴的表現 (symbolic idiom) としての役割を果たすものであったと著者は述べる。

以上の記述から明らかなごとく、本書全体を通じ著者が一貫して重視せんとするのは、帝政前期においてはローマ市が、帝政後期においてはコンスタンティノーブル市が、各々果たした「象徴」としての役割であり、それゆえに本書の課題は、「これらふたつの巨大な都市への物資供給の実際を、その象徴性を理解するための解釈法に結びつける試み」として設定されることになる。かかる試みは、帝政前期・後期を問わずローマ帝国のダイナミクスを我々が理解するための助けとなるものであると著者はいう。また著者によれば、ローマ市とコンスタンティノーブル市への物資供給は、古代地中海世界の経済的統合のための手段であり、その基本原則は徴税と再分配とであったが、それには首都を維持するために皇帝の確固たる関与が前提とされた。かかる関与を皇帝たちが行なったのは、彼らが巨大な首都の象徴的価値が政治的影響力を補強することに気づいていたからであるという。「需要と供給によって描き出される経済的景観は、同時に皇帝権力とその支配の想像上の心象風景としての役割を果たしていた。」著者はかく述べ、皇帝たちが認識していたふたつの都市の重要性が、その巨大な規模にというよりも、むしろ強力な象徴としての役割——著者はそれを G. Dagron の著書の書名から借用しつつ¹²⁾、「想像のローマ市」と「想像のコンスタンティノーブル市」と呼ぶ——にこそ存したことを主張するのである。

第1章では、まずローマ市の巨大さが殊更に強調される。いわく、帝政前期においてローマ市は、100万人の人口を擁する大都市であって、それはローマ世界の他のいかなる都市よりも圧倒的に大きく、また中世から初期近代のヨーロッパの諸都市をも凌駕するほどであった。高さ40フィート、長さ12マイルの市壁に取り囲まれた範囲は5平方マイルを超え、郊外地域はさらに外へと広がっていた。地下には巨大な排水溝が流れ、地上にはコロッセウムやキルクス・マクシムスなど人びとに強い印象を与えるモニュメントが屹立した。汚穢の量は膨大であった。また贅沢な大邸宅から薄汚れた借家まであらゆる住まいが存在した。ある異端のキリスト教徒は、天上において各々の神は大きな共同住宅におけるがごとく別々の階に坐すと述べたが、だとすれば帝政後期に46000以上もの共同住宅を数えたローマ市は、実に天上の何千倍も巨大な都市だったといえる。しかしながら著者は、かかるローマ市の「驚

くべき巨大さ」から直ちに、それが現代社会において大都市が担っている様々な役割を等しく果たしていたと考えることはできないという。

著者によれば、属州にとってローマ市は利益というよりもむしろ重荷であった。古代・中世世界において都市の規模は物資供給の限界の反映であったことに照らすならば、100万人の人口を擁するローマ市は不自然なほどに肥大した都市であって、古代経済の生産能力にとり過大な負担となっていたであろうと著者はいう。前3世紀前半において15万人から20万人を数えたローマ市の人口は前2世紀末までに40万人に達し、前1世紀半ばには32万人の男性市民が小麦の無料配給受給者として登録され、その数はアウグストゥス治世には20万人から25万人で安定していたようである。膨大な人口を養うべく、帝政前期には少なくとも毎年22万トンの穀物が、また大量のオリーブ油やワインが、帝国各地からローマ市へと輸入されたが、その際の収集・輸送・貯蔵・分配のいずれについても巨大なインフラが必要とされた。水の供給もまた巨大な規模で行なわれた。1世紀後半には9つの水道が一人あたり毎日50ガロンの水を運び、4世紀までに水道の数は19に増え、この水は飲用・浴場・清掃などに利用された。さらに皇帝たちは、食糧供給に加え市民に娯楽を提供した。パンとサーカスである。しかし見世物に供される剣闘士・競走馬・野獣はなべて、属州や辺境地域から輸入されたものであった。またローマ市には雇用の機会がふんだんにあったが、支払われる賃金は属州からの租税で賄われた。つまりローマ市民は、無料で配給される食料と租税から支払われる賃金という、属州からの収入を二重の意味で食物にしていたことになる。人間もまた「輸入」された。死亡率の高いローマ市において、その巨大な人口を維持するためには絶え間ない移住者の存在が不可欠であった。

このようにローマ市に対して属州は莫大な負担を負っていたわけであるが、それは一面において属州における農業生産を刺激する効果をも持ち、例えば北アフリカでは穀物やオリーブ油を産する農地が顕著に増加した。しかしながら、かかる農業の拡大も、たとえそれが属州民に利益をもたらすものであったとはいえ、首都に物資を供給するという必要性の結果として生じたものには相違ない。従ってローマ市は消費都市の古典的な例であり、かつ本質的に寄生的な都市であったと著者は述べ、次のごとく問いかける。

では、なぜ初期の皇帝たちは、これらの物資を巨大なレベルでローマ市へと供給するということを決めたのであろうか。そしてなぜその後の皇帝たちは、数世紀間にわたる物資の集中を維持したばかりでなく、よりたくさんの無料配給食糧や建造物・施設の提供によってかかる物資の集中を高めさせたのであろうか。これらの問いに対する著者の回答は以下のようである。すなわち、確かに巨大建造物は権力のしるしでありその道具であって、それらが帯びる象徴的意味は戦略的価値や実用的機能よりも重要視され、皇帝たちは多大な犠牲と危険とを承知の上で巨大都市の法外さを維持せんと努めたが、著者によればそれは何よりもローマ市の巨大さが、第一に特定の歴史物語への、第二に皇帝権力についての特定の観念への、第三に帝国についての特定の思想への、イデオロギー的関与を表現する強力な象徴

であったからだという。つまり、皇帝たちのローマ市への関与とは共和政と元老院の伝統の尊重を意味し、それは彼らをしてその支配が共和政の伝統の延長線上にあると主張することを可能にした。また皇帝たちは、自らの権力と影響力を顕示するためにローマ市を巨大な舞台として利用し、そこで自らの存在を公的に示すことによって直接間接にその支配の合法性を確認していた。さらにローマ市の巨大さは属州民に対するメッセージともなった。属州民は、一方において巨大な首都への物資供給の見返りとしてその安全を保証されたが、他方においては納税を通じ自らの劣位と従属にも気づかされた。

かくしてローマ市は、地中海世界に巨大な生態的・経済的影響を及ぼすことになった。属州に対する徴税は象徴的帝国主義 (symbolic imperialism) の一形態として、属州民に自らは被征服者でありローマ市は征服者であるという感覚を絶えず想起させた。「海の向こうの属州において帝国主義であったものは、ローマ市においては娯楽に変容した。」ローマ市の住民からすれば、地中海は巨大な食卓のように見えたことであろう。イデオロギー的構築物としての「ローマ」は、首都の特権の住民が属州の従属的住民に対し優越しているという現実を構築するための媒体であった。ローマ市がその巨大さを増すほどに、支配と服従のイデオムとしての「ローマ」もまた、一層効率的であったのだと著者は述べる。

しかしながら、以上のごときローマ市の規模を維持するためのイデオロギー的動機は、3世紀末から4世紀初頭になるまでに大きく変化した。「ローマ」という思想がその潜在力を喪失するとともに、ローマ市そのものもローマ社会のなかで周辺的な地位に追いやられていった。この時までに変化した点として著者が挙げるのは以下の三点である。

第一に、皇帝たちがその支配を正当化するために異なったイデオロギーと異なった組織へますます眼を向けるようになった。この時代、皇帝権力は明らかに軍隊の支持に依存するようになり、その合法性は神祕的権力と結びつくようになった。もはや皇帝たちは、共和政的皇帝 (Republican emperor) のごとく振舞うべき存在とは考えられなくなった。共和政的伝統は軽視されるようになり、軍人皇帝ないしはキリスト教徒の軍人皇帝にとって、ローマ市の維持はもはや第一の優先事項ではなくなった。代わって重要と目されるようになったのは軍隊とキリスト教会であって、今やローマ市とイタリアは属州であるかのごとくに扱われ始めた。第二に、3世紀以後皇帝たちはほとんど全くローマ市を訪れなくなった。皇帝たちは、ガリア北部からイタリア北部・バルカン半島を経て小アジア、そしてシリアへと到る大きな弧を描く地域で過ごすようになり、権力の誇示もこれらの地域に所在するトリア・ミラノ・セルディカ・シルミウム・テッサロニカ・コンスタンティノーブル・アンティオキアといった諸都市で行なわれた。つまり皇帝たちはその権力の舞台としてもはやローマ市を必要とせず、ローマ市は今や単なる辺境の最末端に過ぎなくなった。第三に、皇帝の所在地の限定とローマ軍の効率性が、ローマ支配の恩恵という点に関してローマ市と属州民との間の力学を劇的に変化させた。かつて属州の安全は国境地帯に駐屯するローマ軍によって保たれていたが、今や属州民による自衛が、はじめ地方貴族や軍人の指導下で、次いでは地方聖職者や修

道士の力を借りてなされるようになった。しかし属州民は、ローマ帝国が国境地帯の属州を放棄したかのごとき場合でさえ、なおローマ人であろうとした。属州民は、かつて納税と安全を引き換えとしてローマ帝国の象徴的帝国主義に加わったが、今や彼らは実質的な帝国主義 (real imperialism) を欲していた。

とはいえ、ローマ史の大きな物語のなかで、やはり首都ローマを無視することなどできなかった。事実上ローマ市が見捨てられたことを受け、4世紀の元老院議員・歴史家・聖職者たちはローマ市の持つ意味を再考し始めた。ここで著者は、元老院議員シュンマクス、歴史家アンミアヌス・マルケリヌス、司教アンプロシウスという三人の古代末期の作家の記述を取り上げ、彼らが各々異なった視角から同時代のローマ市に対してどのような眼差しを注いでいたかを対比的に示している。

すなわち、シュンマクスは皇帝に共和政時代の宗教復興を請願し、女神ローマ（都市ローマを人格化した神）を想起せしめんとし、またパンとサーカスを要望するなど、彼が共和政の皇帝を望んでいたことは明らかであるが、かかる物欲しげなシュンマクスに対してアンミアヌスは、周辺的な地位に追いやられたローマ市について現実的な評価を下している。彼は国境地帯での軍事行動を重要視し、ローマ市はもはや支援するに足らずと記し、元老院議員の要求と教養とを嘲笑し、「ローマ市において記憶に留むべきことは何一つ行なわれなかった」と記す。さらに当時勃興しつつあったキリスト教の観点からも共和政の伝統は無意味だと認識された。シュンマクスを論駁したアンプロシウスは、皇帝を「キリスト教徒皇帝」と呼称することにより、帝国支配について新たな視角を定めることとなった。「キリスト教徒皇帝」たるもの、もはや伝統宗教を支持しえない。「キリスト教徒皇帝」にとっては、共和政の皇帝のために構築された旧来の都市中心部と壮大な建造物よりも、キリスト教会の多くが所在する郊外の後背地の方が今や重要となり、皇帝権力の舞台もローマ市の中心部と郊外とで逆転することになったのである。

さて、以上がローマ市のたどった歴史の大筋であるが、著者は第1章のまとめとして、ローマ市とローマ帝国とが同一視されてきた点に注意を促している。著者によれば、古代においてローマ市の運命はローマ帝国の運命を予期せしめるものと考えられていたが、かかることは現代の歴史解釈にとりふたつの重要な含意を持っているという。

含意のひとつは、政治的国家として統一されかつ経済的領域として統合された地中海世界の可能性である。ローマ帝国は地中海全域に対し実に400年以上に及ぶ政治的支配を維持し、その帝国主義は経済的統合を結果したが、しかしかかる結果は経済システムではなく、ローマ市という権力と優先権のイデオロギー的象徴がしからしめたものであった。いまひとつの含意は、後期ローマ帝国の変容 (transformation) に関する現代の叙述である。著者は、「衰退と没落」は依然として現代の古代末期史家の間でもパラダイムとしてその魅力を失っていないと述べるが、しかし、エトワード・ギボンの、ローマ市に残る廃墟を目にしてローマ帝国の没落を記述せんと決意したとの回顧は、彼がローマ市とローマ帝国とを混同してい

ることを示すものだとし、「衰退と没落」はローマ帝国の移行（transition）を想像する方法として不適切だと厳しく批判する。いわく、「衰退と没落」はあまりにも飛躍が多く、あまりにも目的論的であり、あまりにも道德的、かつ後継諸国家に対しあまりにも輕蔑的に過ぎると。そして、「もうひとつの異なる『ローマ』について考えることは、ギボンに、そして私たちに、古代末期に関して異なる視角を与えてくれるであろう」と結ぶ。

このもうひとつの「ローマ」、すなわちコンスタンティノーブル市を扱うのが第2章である。いわく、今や女神ローマが白い髪と錆びついた槍とともに想像されるようになったことから知られるように、古代末期のローマ市は「古きもの」として認識されていた。3世紀には歴史家ヘロディアヌスの述べたごとく皇帝たちの坐すところがすなわち「ローマ」となり、そのなかからやがてコンスタンティノーブル市が最も重要な都市となっていった。330年にコンスタンティヌス1世により創建された新首都コンスタンティノーブルは、イタリア権（*ius Italicum*）を獲得して「新しいローマ」「若きローマ」として知られるようになったが、それはあたかもイタリアとローマ市が住所変更をしたもののごとくであった。

ローマ市の運命はコンスタンティノーブル市のそれとは対照的な方向へと向かっていった。数々の印象的なモニュメントは、地震、火事、「蛮族」の攻撃、また教会など他の建造物に利用するための略奪などによって文字通り毀壊し始めた。属州からの物資供給は絶え、ローマ市に存する国庫・家畜飼育場・穀物倉庫のいずれも空ろとなった。5世紀初頭にはなお50万人を数えたローマ市の人口は、5世紀半ばには35万人、6世紀初頭には6万人となり、この2世紀間の間にローマ市は最盛期の人口のほぼ95パーセントを失ったことになる。市内には代わって墓が増加した。かつての首都は、今や正しくゴーストタウンとなり果てた。537年に東ゴート族がローマ市を包囲した際、ローマ市民はハドリアヌス廟を飾る大理石の彫刻を破壊し、その破片を市壁に登らんとするゴート族に落としたという。彼らは文字通り自分自身の遺産で自らを守ったのである。かくしてローマ市とコンスタンティノーブル市の役割は逆転した。今や後者が前者を守る立場となったのである。

しかし著者によれば、ビュザンティウム（コンスタンティノーブル市の古名）に新しき首都が置かれるべきことは地理的にも地勢的にも自明ではなかった。そこには過去の歴史が欠けていた。コンスタンティノーブル市となる以前のビュザンティウムは、ギリシア・ローマ・聖書・キリスト教のいずれの歴史においてもほとんど何の影響も及ぼしたことのない目立たない都市であった。それが新しき首都となるためには、基礎的な資源や包括的な設備のみならず、より長くより入念に仕上げられた歴史を必要とした。既に見たごとく古代末期におけるローマ市の変化は、ローマ史のマスター・ナラティブに修正を迫ったが、それは同時期のコンスタンティノーブル市に関しても同様であった。このとき問題となったのはコンスタンティノーブル市に背景となる歴史がないということであり、そこで皇帝や歴史家たちは、新しき首都のための新しき歴史を構築しなければならなかった。たとえ想像上の歴史であっても、何の歴史も持たないよりはましだったろうと著者は述べる。

さて、首都となるためにコンスタンティノープル市にはまず人口が必要であった。330年に3万人であった人口はその後急激に増加し、5世紀初頭には30万人に、6世紀には60万人に達した。その多くは東方属州からの移住者であり、創設から2世紀間の間にコンスタンティノープル市には100万人以上の人びとが移住した。同時代のローマ市とイタリアが「蛮族」に侵入されたとすれば、コンスタンティノープル市は属州出身のギリシア人に侵入されたともいえよう。またコンスタンティウス2世による元老院創設は、東方属州の都市名望家を取り込み新規に元老院議員層を形成せしめたが、かかる「新人」の多くはローマ市の元老院議員の家系にみられたごとき高貴な貴族的血統を欠き、ソーセージ職人や風呂屋の三助さえ含んだ。350年代には300人であったこの元老院議員の数は、380年代までに2000人に増加した。新興都市コンスタンティノープルの提供する好機と報酬は、属州名望家と一般州民のいずれにとっても抗し難き「セイレンの歌声」のごときのものであった。

増加する人口は食糧と水とを必要とした。コンスタンティノープル市への穀物は、トラキア・ビテュニア・フリュギアなど隣接地域からも供給されたが、多くは海外から、特にエジプトは穀物供給地として最も重要であった。6世紀半ばまでにコンスタンティノープル市向けのエジプト産穀物の輸出量は往時のローマ市向けのそれを凌ぎ、十分な量の穀物供給の重要性を知悉する皇帝は、船着場を拡張し大規模な穀物倉庫を建造した。水供給については、ハドリアヌス帝の水道に加え、ウァレンス帝により100マイル以上に及ぶ大水道が新規に建設され、また貯水池や溜池がこれを補完し、かつ夏季や籠城時の備えとなった。また、人口の急増に遅れを取りつつ、市壁・建築物・広場・モニュメントが構築された。特にテオドシウス1世の造成した広場は、同郷スペイン出身のトラヤヌス帝がローマ市に造ったそれを彷彿せしめたごとく、初期のコンスタンティノープル市は部分的にはローマ市のイメージの下で建設された。にもかかわらず皇帝たちは、例えば大宮殿及び隣接する競馬場などモニュメント建造によって、「新しきローマ」を自らの支配権を提示するための舞台装置へと漸次変容させ、そこで執り行われる儀礼の演出は入念の度を増した。儀礼の主役は皇帝であって、元老院議員は単なる皇帝の取り巻きとして性格俳優を演じたに過ぎない。従って個々の要素の外はローマ市に類似するとはいっても、古い共和政的皇帝の虚構を維持せんとするごとき試みは全くなされず、今や儀礼は皇帝を神の地上における似姿として想像せしめた。さらにローマ市と異なりコンスタンティノープル市は、創建当初より市内中心部に聖使徒教会と聖ソフィア教会をはじめとするキリスト教会が建造されていたが、これら教会もまた皇帝権演出のための舞台装置であった。

コンスタンティノープル市は、ローマ市のごとく皇帝とその権威を示すために構築された都市であった。しかし皇帝とキリスト教とが支配するコンスタンティノープル市においては、皇帝たちは過去の伝統及び父祖の慣習と政治組織の守護者たる富裕な元老院議員に拘泥する必要はなかった。要するに新首都はその創建時から、共和政的皇帝ではなく、キリスト教徒皇帝の演出のために設計された都市だったのである。他方、東方属州が、コンスタン

ティノーブル市への納税と引き換えに軍隊による防衛と国境地帯の安全を確保されたことはローマ市の場合と同様であった。しかしながら著者の考えでは、ローマ市の象徴的帝国主義が属州に被征服者としての過去を絶えず想起させるものであったのに対し、コンスタンティノーブル市は属州を征服した過去を持たず、従ってかかる過去の欠落に代えて象徴的帝国主義の力に頼ったのだという。それによって新首都は、本来何らの権利も持たないにもかかわらず、東方属州民に服従を承服せしめたというのである。

コンスタンティノーブル市の新しい歴史的運命を補強するためには、それに対応する歴史が必要とされた。古代末期における大きな革新のひとつは、それに先立つ古代の歴史を書き直したということであった。ローマ市もコンスタンティノーブル市も、その歴史は現状に沿って調整されねばならなかった。特に後者は、その象徴的帝国主義を補完し強化するために適切で象徴的な歴史を必要とした。皇帝はコンスタンティノーブル市を聖書・ギリシア・ローマ・教会の各歴史のなかに位置づけんとしたが、それを媒介する手段のひとつがモニュメントであった。諸都市からモニュメントが略奪され、首都に移された。同時代人は記す、「コンスタンティノーブル市は他の全ての都市を丸裸にすることにより創建された。」かかる略奪のプロセスのなかで新首都はこれらの諸都市の歴史・記憶をも自らのものとし、かつ聖遺物を収集することによっては「新しきエルサレム」として教会のヒエラルキーのなかの優位を得た。著者は若干の皮肉を交えていう、「後期ローマ帝国時代のコンスタンティノーブル市は、多くが東方属州全域のモニュメントから再利用された物資で構築された、『環境にやさしい』首都（“green” capital）であった。」

しかしコンスタンティノーブル市は、単に没収された芸術品からなる博物館以上のものになっていった。今やそれは、盗まれたのち再配置された歴史叙述の宝庫であった。事実いくつかの点では、かかる東方属州の遺物と伝統とは、コンスタンティノーブル市においてようやくその真の歴史的意味を見つけたのだともいえる、と著者はいう。モニュメントと伝統の略奪を通じて、さらには暗黙の比較と意図的な曲解を通じて、新しき首都は聖書・ギリシア・ローマ・教会の歴史を十分に満たすものとしてその姿を現しえたのである。

新しき首都の新しい歴史を表明するために媒体となるもうひとつの手段は無論文学的叙述であり、ここで著者が取り上げるのは6世紀初頭のヘシュキオスによる叙述である¹³⁾。ヘシュキオスは、トロイ・ローマ・ビュザンティウム・コンスタンティノーブルにまつわる世界史を記述した。彼にとって第一の優先事項はビュザンティウムの発展をギリシアの神話と歴史のなかに位置づけることであり、その叙述には荒唐無稽な物語も含まれた。無論、重要なのはその言外の意味である。すなわち彼は、ギリシアの英雄たちに言及しながらその実、「古きローマ」のイメージのなかでビュザンティウムを表現していたのである。しかしながら著者は、ヘシュキオスがコンスタンティノーブル市を「ローマ的な」背景と結びつけながら、実際のローマ史にはほとんど言及しない点に注意を促す。首都を示す略称が「元老院とローマ市民」ではなく「皇帝と人びと」となった時代、ヘシュキオスのごとき「新しきロー

マ史のなかでは、皇帝たちにとって不都合な古きローマ史の諸側面は、今や失われるか再定義されるかしていたのである。」

かくしてコンスタンティノーブル市は巨大都市かつ新しき帝国首都へと変容したのであるが、その創設から3世紀間の間は、往時のローマ市に対するカルタゴ市のごとく、他の東方属州の有力都市すなわちアンティオキア市とアレクサンドリア市が、潜在的な首都として自らの優位を強く主張していた。しかし4世紀後半以降、北方国境地帯が新たな焦点とされるようになると、皇帝たちは東方国境地帯に赴かなくなり、両都市のいずれにも滞在しなくなってゆく。かかる有力都市間の政治的分裂は、キリスト教教会や教義論争とも絡んで各都市の司教たちの対立をも惹起したが、やがて6世紀に到り、シリア・パレスティナ・エジプトなど帝国南半分の多くがペルシア皇帝ホスロー1世の手中に落ちたことによって幕引きとなった。その後発生したアラブの侵入は、ローマ帝国とペルシア帝国の双方を攻撃し、今度は後者から先の領土を奪った。アラブ支配下に入った地中海東部の諸都市は、もはや政治的・教会的優越をコンスタンティノーブル市と競うことはない。なぜならば今やそれらは中東帝国（a Middle Eastern empire）に含まれたからである。

6世紀、コンスタンティノーブル市は一時世界最大の都市であった。その人口はやがてローマ市以上に急速に減少した。6世紀半ばの黒死病、地震、火事、軍事的敗北、またエジプト喪失による穀物供給量の劇的な減少やアヴァール族の侵入による主要水道の断絶などにより、最盛期には60万人であった人口の90パーセントを失った。しかし時が下って18世紀半ばには、イスタンブルは再び帝国首都として繁栄したから、もしギボンがそこを訪れたならば「衰退と没落」ではなく「興隆と活力」を想起したかもしれないと著者はいう。

かくしてふたつの都市の歴史を描き終えた著者は、本書の核心をなす主張を次のごとく要言する。「ローマ市とコンスタンティノーブル市のいずれの場合も、その巨大な規模は経済的原理によるものではなく、イデオロギー的関与の結果であった。」すなわち著者は、序章においても強調していたごとく、既に古代において、ローマ市とコンスタンティノーブル市への物資供給という経済的負担は、それらが皇帝権と帝国を定義するための象徴的価値を持つことの結果として生じたものであったと考えるわけである。そして最後に、著者は1764年10月15日（その日の朝は雨だった）、ギボンがカピトリヌス丘の廃墟に佇んだ際の想像力に触れ、「我々現代の歴史家も皆、ローマ市とコンスタンティノーブル市についての白昼夢のなかで、古代の過去を想像する才能と大胆さを持ちたいものだ」と結ぶ。

以上が本書の内容である。講義を基にしたという性格のためか、概説的に感じられる箇所が少なくなく、参考文献一覧も本書全体の分量から見て網羅的包括的となりえないことは当然であるが¹⁴⁾、上に見たように著者の主張そのものは極めて明瞭であり、ローマ市とコンスタンティノーブル市の各々に関する諸側面を実に巧みに抽出し対比しえているといえよう。本書はいわば「二都物語」であるが、これを二項対立的・図式的といったごとき言辞もて批評することは適切ではあるまい。近年、例えば共和政期のローマから12世紀のビザンツま

で「権威」に着目して扱った S. Takács の近著のように¹⁵⁾、比較的広く時代幅を取った俯瞰的試論が散見されるごとく、かかる試みは *omne aevum tribus explicare cartis doctis* の詩句にもかかわらず¹⁶⁾、昨今の研究の細分化への懸念やマスター・ナラティブへの希求に対しよく応えるところがあるのであり、本書の価値もまずはそうした点に見出されるべきであろう。

加えて本書は、「古代末期」研究の新世代がいかなる研究姿勢を取っているかを知る上でも示唆に富む。著者は特に第1章末尾でギボン的な「衰退と没落」概念を厳しく批判し、それによってはローマ帝国の歴史を語ることは出来ないという。これは一見 Brown ら第一世代の考え方と同じである。但し著者が、Bowersock や Cameron のごとく「衰退と没落」概念全体ではなく、ギボンがローマ市の歴史とローマ帝国のそれとを混同した点を批判していることには注意が必要であろう。実際、著者はふたつの首都の衰亡の側面を看過しているわけでは決してないのである。にもかかわらず、著者は本書において、事実として「衰退」「没落」に相当する歴史的展開をも扱いながら、全体としては「象徴的価値」を持つふたつの都市の交代劇として描くことで、すなわち当該時期の「移行」ないし「変容」を活写することで、「衰退」「没落」の言辞の使用を巧妙に避けている。この著者の態度からは、新世代の「古代末期」研究者の間にも、なお「衰退と没落」に対する根強い抵抗感が存することが窺知されよう。

無論、新しい世代の「古代末期」研究の詳細な動向分析は別稿を要する課題であって、残念ながら本評で立ち入って検討する余裕はないが、ここでは本書の内容に照らし、イタリアの史家 A. Giardina による以下の指摘を留意点として挙げておきたい¹⁷⁾。すなわち Giardina は、「衰退と没落」を「繁栄」と言い換えてみたところで問題が解決されるはずはないし、「古代末期」の経済史において最近流行の「移行」(transition) なる概念も、「変容」(transformation) との関連如何を含め恣意的に使われることが多く、その「中立性」は根拠のないものであるとし、さらにまた、歴史的な再構成というものは本来的に目的論的なものである、と述べているのである。かかる諸点は著者も十分承知の問題ではあろうけれども、しかし Giardina の指摘は、本書の内容（例えば本書においては「移行」と「変容」がどのように使い分けられているか明確でない）や著者の歴史観（例えば歴史学の目的論的性格について）に対し重大な批判となる以上、これを単に立場の相違に帰して能事足れりとするわけにはゆくまい。

また、著者が「象徴的帝国主義」の名の下に主張するごとく、ローマ市とコンスタンティノーブル市の「象徴性」こそ、首都への物資供給を実現せしめかつ帝国支配を可能ならしめた動因であったという捉え方をする場合、「帝国主義」なる語の使用の是非はさておき、これらふたつの帝国首都をかく象徴的たらしめたものは果たして何であったかという疑義を呈する余地は依然残されていよう。なぜならば、もし帝国首都がその巨大さ壮麗さを抜きにしては「象徴」たりえなかったとすれば、著者の主張とは逆の理解も十分に成立しうると思われ、従って「象徴」たる帝国首都とそれを支える物資供給との関係は、著者のいうごとく

原因と結果の関係としてよりも、かえって相補的なそれとして理解されるべきことのように感ぜられるからである。

さらに、本書ではコンスタンティノーブル市の覇権確立に到るまでの帝国東部における有力都市間の対立は取り上げられている一方で、帝国西部におけるローマ市と他の有力都市（トリアやミラノ、ラヴェンナなど）との間の関係如何は触れられず、ローマ市とコンスタンティノーブル市の間の直接的な相互関係もまた等閑視されていることを見るに、本書はやはり本質的に「ふたつの都市の物語」であって、その限りでは本書副題にあるごとく「ローマ史を書き直す」という狙いまでもが達成されているとは残念ながらいえないであろう。

とはいえ、著者の明晰な主張と鮮やかな対比の手法が、本書をたいへん魅力的なものとしていることは確かである。本書によって世界史上の一大転換期に関する巨視的試論が、たとえ概説的にではあれ示されたことは、今後当該時期についての議論が「大きな物語」のレヴェルにおいて活発化することを予期させるものと見なしてよいのではなかろうか。

註

- 1) 1970年代以降の英米学界を中心とする「古代末期」研究の展開とその問題点については、南雲泰輔「英米学界における『古代末期』研究の展開」『西洋古代史研究』9, 2009年, 47-72頁。
- 2) 「衰退」概念の擁護については、J.H.W.G. Liebeschuetz et al., *The Use and Abuses of the Concept of 'Decline' in the Later Roman History*, L. Lavan ed., *Recent Research in Late-Antique Urbanism*, Portsmouth, 2001, pp.233-245. J.H.W.G. Liebeschuetz, *Late Antiquity, the Rejection of "Decline", and Multiculturalism*, J.H.W.G. Liebeschuetz, *Decline and Change in Late Antiquity*, Aldershot, 2006, XVII. 「没落」の事実については、B. Ward-Perkins, *The Fall of Rome and the End of Civilization*, Oxford, 2005. P. Heather, *The Fall of the Roman Empire*, Oxford, 2006.
- 3) 例えば、後期ローマ史家 J. Matthews の 70 歳の誕生日に捧げられた論文集 S. McGill, C. Sogno & E. Watts eds., *From the Tetrarchs to the Theodosians*, Cambridge, 2010, p.1, note 3.
- 4) そうした試みのなかで、「古代末期」はなお概念としての揺らぎを克服しえていないようである。南雲泰輔（紹介）「A. Cain & N. Lenski eds., *The Power of Religion in Late Antiquity*, Farnham, 2009」『史林』93-3, 2010年, 464-465頁を参照。
- 5) 足立広明「シフティング・フロンティアーズ VII」『古代史年報』6, 2008年, 55頁。
- 6) 著者については、<http://www.lsa.umich.edu/history/facstaff/facultydetail.asp?ID=131> を参照。
- 7) 伊藤貞夫・本村凌二編『西洋古代史研究入門』東京大学出版会, 1997年, 234頁。
- 8) 本書については、T. Barnes, *Was There a Constantinian Revolution?*, *JLA* 2, 2009, pp.374-384 も参照。
- 9) なお、評者は「古代末期」を独自の時代理解の概念とみなしているため、通常はこれを括弧つきで表記するが、以下の本書の紹介部分に限り、煩雑を避け括弧は外して記述する。
- 10) 本書については、伊藤貞夫「史料研究と学説史」『日本学士院紀要』64-2, 2010年, 109-140頁をも参照。
- 11) 本書の電子版は、http://www.doaks.org/publications/doaks_online_publications/EHB.html で利用可能。
- 12) G. Dagron, *Constantinople imaginaire: Etudes sur le recueil des 'Patria'*, Paris, 1984.
- 13) ミレトスのヘシュキオスによる著作『コンスタンティノーブルのパトリア』に関しては、栗本薫「コンスタンティノーブル 330 年」『史林』71-2, 1988年, 223-258頁, 特に 246-257頁をも参照。
- 14) 本書で触れられていない近年の関連文献として例えば、B. Lançon, *Rome dans l'Antiquité tardive*, Paris, 1995 (= Id., *Rome in Late Antiquity*, New York, 2001) など。
- 15) S. Takács, *The Construction of Authority in Ancient Rome and Byzantium*, Cambridge, 2009.

- 16) Catullus 1.6-7. Cf. S. Smith, Rev. of Takács (2009), *BMCR* 2009.07.02. (<http://bmcr.brynmawr.edu/2009/2009-07-02.html>)
- 17) A. Giardina, The Transition to Late Antiquity, W. Scheidel, I. Morris & R. Saller eds., *The Cambridge Economic History of the Greco-Roman World*, Cambridge, 2007, pp.743-768, esp. pp.745-748, 753-755.

【付記】本稿は平成 22 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。